

薔薇十字叢書  
いつ き さえずり  
縋鬼の囀

---

著：愁堂れな  
Founder：京極夏彦



富士見L文庫

らつぎのびえずり  
目次

# 縊鬼の囃

あとがき

## 縊鬼〔いつき〕

『反古のうらがき』にみえる妖怪。江戸麴町（東京都千代田区）の某組頭の屋敷で酒宴が開かれたとき、よく酒を飲んで落語を披露する同心が、約束していたのにもかかわらず姿を見せない。やがてその同心はやってきたが、「今日は急用があるので断りにきた。喰違門に人を待たせているからこれにて」といって、去ろうとする。

組頭が「御頭衆の寄り合いで約束を破るとは何事か。訳を話せ」というと、男は「首を括る約束をした」などといい出す。そこで、とりあえず男に酒を飲ませて落ち着かせるとそこに、喰違門で首吊り自殺があったという知らせがあった。組頭は再度、男に訳を尋ねると、男は「夢のようでよく覚えていないが」と前置きし、次のように語った。

夕方に喰違門のところまできたら、誰かにここで首を括れといわれた。拒否できない気持ちになり、今日はお頭のもとに行く約束をしているので、一言断ってからにしたいといううと、その人は組頭の門のところまでついてきて、早く行ってこいといった、それで断り

にきたのだという。その何者かの命令は絶対に守らなければいけないと思ひ、まったく疑問は感じなかったと、男は淡々と語った。

「今は首を括る気があるか」ときかれた男は、自分で首を括る真似をして、「あな、おそろしや」といったという。

縊鬼は名前が示す通りに、首を括らせようとする一種の霊のようなものなのだろう。同心は組頭の機転で命が助かったが、その身代わりとして他の者が首を括ったようである。

『随筆辞典 奇談異聞編』柴田宵曲編

(角川文庫『改訂・携帯版 日本妖怪大事典』より)

## 1

「あの……」

土曜日の午後、人気の映画を観るために渋谷しよやに行くべく一高の校門を出たとき、背後からか細い声が聞こえてきたのに、僕と中禅寺ちゆぜんじは足を止め二人して振り返った。

「あの……すみません」

声をかけてきたのは、セーラー服姿の女学生だった。このあたりでは見かけない制服である。

髪をお下げにしたその少女は、僕たちと同年代に見えた。色白で瞳ひとみの大きい、可愛い子だ。緊張しているのか頬は紅潮し、黒目がちの大きな瞳は酷ひどく潤んでいる。

「なんででしょう」

観察するばかりで返事もできずにいた僕の横から、中禅寺が彼女に声をかけた。声に誘われ視線を彼へと戻すと、いつもの仏頂面よりは心持ち、柔らかな表情をしているように見える。

一族郎党死に絶えたようないつもの顔は、ご婦人には怖がられるという自覚が一応あるということだろうか。などと、口に出したら吐られそう——出さなくてもなぜか見抜かれるのだけれど——ことを考えていた僕は、てっきり彼女は道でも聞いてきたか、それとも誰か一高生を呼び出してほしいとかだろろうなと、勝手に声をかけてきた用件を予測していた。

なので彼女が中禅寺を見つめ、

「中禅寺……秋彦さん、ですよね？」

と名を呼んだとき、あまりに思いがけない出来事に仰天してしまった。

「はい」

それこそ思考力が途切れるほどの驚きに見舞われていた僕が立ち尽くす中、中禅寺が訝しそうに眉を顰めつつも、少女に頷いてみせる。

「あの……あの、これ……っ」

と、少女はブリーツスカートのポケットから洋封筒を取り出すと、両手でそれを持ち中禅寺へと差し出してきた。

封筒の表面には『中禅寺秋彦様』と宛名がきちんと書いてある。

これはもしや——。

中禅寺もさすがに驚いたのか、一瞬その場で固まっていたが、すぐに手を伸ばすと彼女

から封筒を受け取った。

彼は涼しい顔をしているのに、なぜだか横にいる僕の顔は少女以上に真っ赤になっていた。すっかり頭に血が上ってしまったのだ。

「よ、読んで……ただけるとその……うれしい、です」

少女は消え入りそうな声でそう言ったかと思うと、ぺこりと中禅寺と、なぜか僕に対しても一礼し、踵を返して駆け出していった。

「あ、君」

中禅寺の呼び止める声が届いているのかいないのか、振り返りもせず駆け去っていく彼女の後ろ姿を、紅い顔のまま僕は呆然と見送っていた。

「関口君、なぜ君が紅くなるんだ？」

中禅寺の呆れた声がしたことで、ようやく我に返った僕が視線を向けると、ちょうど彼は渡された封筒をひっくり返して差出人の名を見ているところだった。

『登阪櫻子』

青いインクで書かれた綺麗な文字が目飛び込んでくる。

宛名の字も綺麗だったな、と思わず凝視していた僕の視界から封筒が消える。中禅寺が制服のポケットに入れたからなのだが、そうして封筒をしまうと彼は、何事もなかったかのように僕に声をかけてきた。

「急ごう。上映時間に間に合わなくなる」

「え？ え？ でも……」

動揺しているのは僕ばかりで、中禅寺はすたすたと先に歩いていってしまった。女学生からの手紙といえば、内容は十中八九——恋文、ではないだろうか。渡してきたあの女学生の態度や表情からしても、そうとしか思えない。

緊張しきった様子で手紙を差し出してきた、彼女の白い指先は震えていた。

紅い頬、潤んだ瞳。思い詰めたような眼差し。

恥ずかしながら僕は今まで誰からも恋文などももらったことはなかった。しかし中禅寺は違ったということか。顔色一つ変えないところを見ると、実は慣れたもの——なのか？

入学してまだ半年も経っちゃんないが、彼が女学生と親しげに話しているところも、恋文を貰うところも一度たりとて見たことがない。

あ、一度だけ、彼が女学生相手に愛想よく振る舞っている姿は見たことがあった。が、それは先輩の榎木津が巻き込まれた事件を解決するという目的があったからで、普段、難しい顔をして超絶難解な本ばかりを読んでいる彼が女学生慣れしているとは、とても思えないのだ。

しかしそれは僕の偏見で、実は中禅寺にとって、恋文を貰うことなど日常茶飯事だというのか。

「……………」

やっぱりちょっと、信じがたい気がする。うーん、と唸りながらその場に留まってしまっていた僕を、中禅寺が溜め息と共に振り返る。

「どうせ失敬なことを考えているんだろうが、『狸合戦』は君が観たいと言いつ出したんだぜ。行く気がないなら寮に引き返すがどうする？」

「あ、ごめん。行く。行きたいよ」

慌てて僕は彼へと駆け寄っていき、二人は並んで歩き始めた。

『中禅寺、今の女の子、知ってる子かい？』

『貰った手紙はやっぱり恋文だよ。おやすくないな』

『見たことのない制服だったね。どこの女学校なんだらう？』

あれこれ聞いてみたいけれど、少しも話すきっかけを掴まえられない。それというのも中禅寺がむっつりと黙り込んだまま、ただ脚を速めているからだ。

普段もまあ、二人でいるときはこんな状態になることがままある。中禅寺が議論に値すると判断を下したネタを僕が提供した場合は、何時間も話し続けることもあるのだが、双方何も喋らずにいることもよくあった。

なのでこれが『いつもと違う』状況とはいえないものの、やはり違和感はある。中禅寺が全身で僕からの問いを拒絶しているように感じてしまうのだ。

やはり照れているのだろうか。しかし、ちらと盗み見た横顔はいつもどおり——否、いつも以上の仏頂面で、珍しくも考え事をしているようである。

もしかしたら彼は——物凄くわかりにくいけれど、やはり照れていて、僕にからかわれることがないよう虚勢を張っているのでは？

それが一番、領ける回答だとは思いつつも、中禅寺が『照れる』というのにはどうも不自然さを感じずにいられなかった。

その後、渋谷で見たのは大ヒットしたせいで製作会社が倒産を免れたという噂の日本映画だった。確かにヒットするだけのことはあり、僕自身楽しく観られただけけれど、やはり中禅寺が貰った恋文のことが気になり、あまり集中できなかった。

夕食はいらないという『止食届』を出してこなかったたので、映画を観たあとにはそのまま寮に戻ることにした。

いつもであれば喫茶店に入り、映画の感想を互いに言い合っただろうに、映画館内が明るくなったと同時に中禅寺に、

「帰ろうか」

と言われてはもう、寮に帰るしかなかった。

中禅寺が好きそうな映画とは最初から思っていなかったが、普段であれば、もし映画が気に入らなかったのなら、気に入らない理由をこれでもかというほどぶつけてくるので、

そういうことではないと思う。

もしや彼は、一刻も早くあの『恋文』を読みたいのではないか。

情けないことに僕がその可能性に気づいたのは、ほぼ会話のないまま、渋谷から一高へと戻り、その門を入ったあとだった。

「僕はちょっと図書館に寄っていくことにするよ」

まだ閉館には三十分ほど時間があるから、と中禅寺はそう言うと、僕の返事を待たずに一人、図書館へと向かっていった。

「あ……うん」

きっと彼は、図書館で一人、あの手紙を——『恋文』を読むのだ。果たしてどんな顔で？ いつもの仏頂面か？ さすがに少しは嬉しげな顔をするのだろうか。しかし中禅寺がにやついている顔なんて、想像もできないぞ。

彼のそんな顔を見てみたい、という衝動が湧き起こったが、結局のところ僕は自分の欲求に蓋をした。我ながら悪趣味だと思ったし、こっそり覗きにいったとしても十中八九——どころか十割、中禅寺には気づかされるだろうとわかっていたからだ。

それで大人しく一人寮に戻ろうとしていたというのに、運悪く北寮の前で面倒くさい先輩に捕まってしまった。

「やあ、関じゃないか。どうした、そんな辛気くさい顔をして。どうせサルのことだ。宿

題を忘れて立たされたとか、そんなつまらない理由なんだろう」

半徑百メートル以内にいる人間が全員聞き取れるであろう大声をかけてきたのは、『一高の帝王』と名高い一学年上の先輩、榎木津礼二郎だった。

『帝王』という表現は少しも大仰でも、勿論、揶揄でもない。学力ばかり、運動能力しか、榎木津はあらゆる面で、天才としか表現し得ない能力の高さを常に發揮している男なのである。そして能力だけではなく、彼の外見もまた、この世の者とは思えないほどに整っているのだった。

希臘の彫刻のよう、だの、西洋の陶磁器人形のよう、だの、彼の美貌を褒め称える言葉は数の限りを知らない。

美貌を含め、あらゆる分野において卓越した能力を持つ彼ではあるが、唯一、性格だけには難があった。悪人というわけではなく、早い話、破壊されているのだ。

まだ生まれて十七年ほどしか経っていないが、彼のような人に僕は今まで会ったことがなかった。

『破天荒』ではまだ足りない。とにかくやることなすことめっちゃめっちゃだ。とはいえ、僕が彼を苦手にしているかというのと、決してそうじゃなかった。時々、困ったな、と思うことはあるが、基本、尊敬しているし、頼りにもしている。何より彼のはちゃめちゃな性格が僕は結構好きなのだった。人は決して自分にはないものを求める、の典型なんだろう。

鬱っっぽい僕と躁っっぽい彼の馬が存外あうのは、そういうことなのかもしれない。

「立たされてなんていないし、辛気くさい顔もしていませんよ。第一僕の名前は関口です。関口巽。関じゃありませんから」

きっちり訂正を入れておかないと、事実だと誤解されかねない。名前もまた、そうである。否定すればしたで、辛気くさい顔は生まれつきなんだな、などと言われてしまうだろうし、名前の呼び方も変わらないんだろが、と先の展開を僕は予測していたのだが、なぜか榎木津は唇を半開きにしたまま何も言わず、じっと僕の頭の上あたりを見つめてきた。

「榎木津先輩？」

ときどき、彼にそうして見つめられることがある。僕が彼のいわゆる『絶世の美貌』に見惚れるのならまだわかるが、榎木津をして『猿に似ている』と言わしめた、僕の顔に彼が見惚れるわけがない。

何を見ているのかわからないが、気恥ずかしいことこの上ない。自然と頬に血が上ってきてしまったが、途端に榎木津に揶揄されてしまった。

「何を紅い顔をしているんだ。まさにサルだな」

「榎木津先輩がじろじろ見るからじゃありませんか」

出会った当初は一高の帝王に言い返すなんてことはとてもできなかったが、随分と打ち解けた今は普通に悪態もつけるようになった。



「なんで僕がサルの顔をじろじろ見なきゃならないんだ。可愛子ちゃんならともかく」  
 気持ち悪いことを言うな、と、榎木津は言葉どおり、否、言葉以上に気持ち悪そうな顔  
 になりそう言ったかと思うと、僕が言い返すより前に、意味不明の言葉を告げたのだった。  
 「なんだ、あいつも隅に置けないな」

「え？」

何を言われたのがよくわからず、問い返したときにはもう、榎木津は僕に背を向けて  
 いた。

「せいぜいからかってやることにしよう。ふふ、これは面白いことになりそうだ」

「榎木津先輩？」

高笑いしながら、榎木津が僕の前から去っていく。寮に戻るのではなくどうやら図書館  
 へと向かっていこうとしているのがわかり、もしや、と信じがたい思いを抱いた。

『あいつ』とはもしかして——中禅寺？

榎木津は中禅寺が恋文を貰ったことを『知って』いるというのか？ そんな馬鹿な。

勿論、僕は喋っちゃいない。もしかして榎木津は偶然、その場に居合わせたのか？ そ  
 れなら僕のことを『辛気くさい』なんてからかうより前に、そのことを指摘しそうなもの  
 だ。

単なる思い過ごしだろうか。『あいつ』とはまったく別の相手で、向かっている先も凶

書館ではなく校舎とか、校門の外とか、そうした場所なんだろうか。

あとをつけようか、と一瞬思ったが、すぐに馬鹿らしい、と考え直した。そんなはずが  
 あるまいと——榎木津が中禅寺の恋文の件を知っているわけがあるまいと思ったからだ。

自分が貰ったわけでもないのに、僕は『恋文』に捉われすぎている。

浮き足立つのもいい加減にしないと、と自制心を働かせ、そのまま寮に戻ることにした。  
 恋文——恋文か。

自制心を働かせたはずなのに、気づけばまた、中禅寺が貰った恋文のことを考えてしま  
 っていることに気づき、自己嫌悪から溜め息を漏らした。

あの恋文を中禅寺はどうするんだろう。思いを受け入れるのか。それとも断るのか。  
 受け入れるのだとしたら——中禅寺に恋人ができる。

中禅寺の女の子。あの中禅寺の。やっぱり信じられない。そのうちに彼から惚気られた  
 りするんだろうか。

『可愛くて仕方がないんだ』

相好を崩す彼の顔を想像するだけで、なぜか背筋が寒くなる。

できることなら、惚気話は聞きたくないなあ、と天を仰いだ僕の目に、宵の明星——薄  
 暮の中、輝く金星が飛び込んできた。

今頃中禅寺は、何を考えているんだろう。恋文の送り主である、あの可愛い女学生へと

思いを馳せているのか。

もしかしたら今、返事を書いているかもしれない。恋文の返事はやはり恋文となるのだろうか。中禅寺が書く恋文とは、一体どんな内容になるんだか。彼の得意とする弁論そのものの、理路整然とした手紙なのか。それとも予想を裏切る、情熱的なものなのか。

ポエムのようなものだとしたら、相当笑えるかも。読んでみたいが、そんな機会は絶対訪れないに決まっている。

恋人ができれば今までのように、余暇を共に過ごすことも少なくなるに違いない。ちょっと寂しいけれど、それは僕の我が儘というものだろう。

あんな可愛らしい女の子を恋人にできる中禅寺が心底、羨ましかった。

「……………」

ああ、と意識するより前に、深い溜め息を漏らしてしまっていた僕は、もういい加減にしよう、と頭を振り、思考を切り換えようとした。

中禅寺は一高に入って初めてできた友達だったけれど、だからといってその友情が未来永劫続くわけではないのだ。

人間関係には常に変化が訪れる。変わらないものなど、この世にはないはずだ。

明日から、中禅寺との関係もまた、変わっていくのだろう。センチメンタルな思いにとられそうになったが、落ち込む必要はない。当然のことなんだから。

自分に自分で言い聞かせている時点で『当然』ではないような気がしたが、世間一般からしてみたら『当然』なのだろうと違和感を抑え込む。

寂しくはなるが、これで完全に交流が途絶えるわけではないのだ。中禅寺が『恋』を手に入れたことをまずは祝おう、と一人頷く僕の脳裏にはそのとき、頬を紅潮させ、中禅寺に手紙を差し出してきた女学生の、震える可憐な指先の残像が浮かんでいた。

その後、中禅寺と恋文について、話す機会はなかった。

翌日は日曜日で、試験も近いゆえ、多くの生徒が寮に残って自習室で勉強している中、中禅寺は誰に行き先を告げることなく『止食届』を出し、昼前に一人、ふらりと出かけていった。

『どこに行くんだい？』

気になるのなら聞けばいいのに、ついに聞く勇氣は出なかった。

「中禅寺は余裕だよな」

同室の生徒が声をかけてきたのに「そうだね」と答えながら僕は、中禅寺の行き先はどこなのかと考えを巡らせていた。

中禅寺がふらりと一人で出かけていくのは、これが初めてではない。以前、行き先を聞いたら、築地つきじに行つたと教えてくれたことがあつた。なんでも築地には彼が師と仰ぐ人がいるとのことで、君も一度話を聞くといい、きっと通い詰めたくなるぜ、と言われ、興味は抱いたものの、結局そのままになつてゐる。

今日も彼は築地に行つたのか。それとも——と行き先へと思いを馳はせた僕の前にはやはり、例の『恋文』の存在があつた。

あのメッセンの手紙になんと書いてあつたのか、知る由もない。が、もしや手紙には、今日、外で会いたい等と書いてあつたのではあるまいか。

綿々と綴つづられた恋心。その最後に、お会いしたい、と書いてあつた、それで中禅寺は今日、出かけていったのではないだろうか。

中禅寺が自主的に出かけた、という可能性もある。手紙を読んで感激した彼が、返事は是非、直接会つて告げたいと、女学生のもとを訪れることにした——とか。

中禅寺らしくない気もするが、彼がどのような恋愛をするのか、その最中、どのような態度をとるのか、知る材料がないゆえ、まるで想像がつかないのだ。

思えば彼とは色々なことについて議論をしたり雑談をしたりしてきたものだが、こと、恋愛に関しては話題に上つたことはなかった。

今、入つたカフェの女給は可愛かつた、といったことくらいなら話したことはあつたが、

初恋はいつだったとか、今、恋をしているかとか、いわゆる『経験』はしているのか、とか、自分たち自身のこととは勿論、誰と誰がどうした等の醜聞も話題に上らなければ、皆がよく興じている猥談わだかも彼とはしたことがなかった。

なぜだろう、と改めて考えてみる。

お互い、男女間のことについて『潔癖』だから、という理由ではないような気がする。

自身の体験となると、初恋はともかく、今、好きな人もいないし、そうした経験も皆無であるので話しようがないのだが、果たして中禅寺はどうなのか。

恋文を貰つたときの落ち着きぶりからして、見た目によらず恋愛経験は豊富なかもしれない。僕がほぼないことがわかつてるので、気を遣つて話題にしないでくれたのだろうか。

反対に、まったく興味がないから話題にしない、という可能性もあり、そっちのほうが当たっている気がした。

そう。まったく興味がないから、淡々としていられた。外出の目的は手紙の返事を出すことで、その手紙には断りの文句が綴つづられている——とか。

「……………」

誰かが面白いことでも言ったのか、自習室内が、どっと笑いに沸く。それで我に返つた僕は、まったく、何をぐるぐると考えているんだか、と思わず深い溜ため息を漏らしてしま

った。  
試験勉強など、まったくできていない。中禅寺が恋文を貰おうが、それにどんな返事をしようが、僕にはまったく関係がないというのに。

なのに何時間も馬鹿みたいにそのことに捉われてしまっている。そんなに気になるのなら、直接本人に聞けばいいのだ。うん、そうしよう。中禅寺が今日、帰ってきたら、どこへ行っていたのかを聞き、そして恋文のことも聞く。そうでもしないと、勉強だって手につきやしない。

話したくないと言われたら、引き下がればいいだけのこと。よし、そうしよう、と自身に言い聞かせ、気持ちも新たに教科書に向かったものの、やはり気づけば僕は、中禅寺に恋文を渡してきた女学生の可憐な姿を思い出してしまったり、中禅寺と彼女が連れ立って歩いている様を想像してしまったりと、またも同じことばかりを考え続けてしまったのだった。

その日、中禅寺が寮に戻ってきたのは、門限ぎりぎりの時間だった。

「どこに行っていたんだい？」

意を決し、問いかけた僕だったが、中禅寺に煩げに、

「まあ、色々」と

と答えられてしまうと、それ以上の追及はできなくなった。

「ええと……」

恋文のことなど、殊更話題にはできない。だがこのままでは、試験勉強に差し障る、と僕は氣力を振り絞り、中禅寺に問いかけた。

「昨日もらった手紙、読んだかい？」

「え？」

僕がそんな問いをするとは思っていなかったのか、中禅寺が珍しく驚いた顔になる。が、それも一瞬のことと、すぐさま彼はいつもの仏頂面に戻ると、

「読んだよ」

とだけ答え、話を終わらせようとした。

「返事は？」

終わらせられては困る、と頑張って食い下がる。

「したよ」

だが中禅寺には、取り付く島もなかった。淡々と返事だけすると、

「風呂に行ってくる」

と部屋を出ていってしまったのだ。

「……………」

これ以上、聞いたところで何も答えてくれないということはよくわかった。だが、僕が

呆然としてしまったのはその理由からじゃない。

手紙の返事をした——中禅寺がそう答えたことに、驚いてしまったのだ。

やはり今日、返事をしに行つたのだろうか。直接か、それとも手紙を投函しに行つただけか。

しかしそれだけなら、門限ギリギリになるわけがない。やはり彼女に会いに行つたんだらう。そして二人で長時間、共に過ごした。いわゆる逢い引き——デートをした、ということか。

だからこそその『色々』。あの可憐な少女と、色々な場所を訪れ、楽しんできた。そんな時間を彼は今まで過ごしてきたのかと思うと、なんとなく彼との間に距離を感じた。

なんだろう。この気持ちは、嫉妬、だろうか。何に対する？ 可愛いメツチェンを恋人に得たことへの嫉妬か。それとも、当然彼もまた無縁だろうと思つていた男女間の恋愛を手にしたことへの？ 単に、共に過ごす時間が少なくなることに対して寂しく思っているのか？ それとも——。

友達だと思つていたのに、あれこれ打ち明けてくれないことに、僕は落ち込んでいるんだらうか。

こうなってくると、果たして彼が僕のことを、友達だと思つてくれるのかどうかも怪しくなってくる、と思わず溜め息を漏らしてしまった僕の脳裏に、中禅寺に手紙を手渡

したあの、可愛いメツチェンの姿が浮かぶ。

『よ、読んで……ただけるとその……うれしい、です』

ああも緊張していた彼女の思いが報われたのだ。彼女のためにも、そしてあんなに可愛い恋人を得た中禅寺のためにも、喜ぼうじゃないか。

それこそ『友達』として。

自身の心にそう言い聞かせながら僕は、それでもどこか寂しいと感じてしまっている己の気持ちに、必死に気づかぬふりを貫いていたのだった。

それから一週間は、何事もなく過ぎていった。

中禪寺ちゆうぜんじに対し、恋文や恋文を渡してきた彼女について話を振ることはできなかったが、彼との間ではそれまでどおりとほぼ変わらぬ空気が流れてはいた。

試験が控えていたからかも知れないが、授業が終わったあとに中禪寺が一人出かけていくこともなかったし、あの女学生の姿を校門の外で見ることもしなかった。

結局のところ、中禪寺と彼女はどうなっているんだろう。試験が終われば中禪寺は一人、彼女に会いに出かけていくんだろうか。

彼が恋文を貰ったという事実はどうやら、僕しか知らないようだった。校内でも『有名な人』である中禪寺の色恋沙汰ざたなら、皆が話題にしてもまるで不思議はないと思うのだが、誰一人として揶揄やゆの一つもしてこないところを見ると、そうであるらしいと推察できた。

本当に恋人ができたのだとしたら、結構な騒ぎになるだろうな、と予測していたのだが、その『予測』は最悪な形で当たることになってしまった。

その朝、食堂で誰かが読み捨てていた新聞を僕は何気なく手に取ったのだが、あとから考えると何か予感があったのかもしれない。

給仕が朝食を運んで来るまでに、と、新聞を開いた僕の目に飛び込んできたのは、見覚えのある名前だった。

『登阪とまふきく櫻子さん（16）』

「……え？」

恋文の送り主じゃないか。

一体彼女の身に何が、と慌てて見出しを見た僕は、脳天を鈍器で殴られたような衝撃を覚えることとなった。

『踏切に飛び込み。女学生、自殺か』

うそ——だろ？

続きは、5月15日発売の富士見し文庫で！

©Rena Shuhdoh, Natsumiko Kyogoku 2017